

『境界線を越える』

たとえば、日付変更線。

その見えない線を越えると急に明日になったり、昨日に戻ったりするらしい。だけど飛行機でそこを通っても何か衝撃を感じるわけでもないし、ただそれまでと同じ時間が流れているだけだ。

この星の上には無数の見えない線が引かれている。

大地にも空にも海にも国境があって、かならず誰かのもちものになっている。

午前0時をまわれば「明日」が「今日」になる。

おたがいの気持ちを知った瞬間、「ともだち」が「恋人」になる。

書類ひとつで「他人」が急に「家族」になる。

書類ひとつで「家族」が「他人」になる。

それはみんな、ものごとがわかりやすいようにと、誰かが決めたルール。おかげさまで私たちの日々はだいぶ整理整頓されている。

だけど実際に目に映る世界は、そんなにわかりやすくはない。何かと何かの間にはかならず漠然とした、曖昧なものが挟まっているから。

夜が明けるとき、真っ暗な空にスイッチで電気を点けるように朝が来るなんてありえない。真っ暗な闇の東のほうが少しずつ少しずつ白み始めて、じーっと見つめているうちにだんだん青色が曖昧になって、朝はいつの間にかそこにある。

人間はその曖昧なものを曖昧なままにしておくことに、どうも不思議な不安を感じてしまう。だからあちこちに線を引き、分類する。ハッキリさせておけば迷わなくてすむし、他人と話が通じやすいから。そうやって良かれと思って引いた線に、知らないうちに自分が縛られてる。もちろん、ことばや目に見えるかたちにして説明できなければ認めてもらえない社会の中で、みんなと同じルールに従うことは悪いことじゃない。むしろ、そうでなくちゃいけない。

でも本当はこの世界は、実に曖昧なものであるということに気づいていたい。白と黒のあいだに、イエスとノーのあいだに、朝と夜のあいだに、ことばにできないグラデーションがある。そしてそのもや一とした部分こそ、この星を美しく輝かせている鍵なのだ。

この30分間だけは、どこにも属さない私になって、どこでもない空を飛び続けて、ただすべてをあるがままに受け止めたい。名前のない気持ちを開放したい。曖昧で不確かな自分と世界の成り立ちに、愛情を持って接したい。

そして日常に帰ってくればまたルールと境界線に従いながら生きる。だけど私は、この体と心が誰にも縛られず真実の自由であることを知っている。だからこそ、毅然としてルールに従うことができる。

あの30分の夜間飛行のあとでは、すべての境界線をいつでも越える鍵を、手にしているのだ。

* maaya *